慶長以來新刀辨疑

追加

八

680
.K2

奉贈鎌田先生序

余生於武弁之家幼好風胡之道慕正宗之風雖數問道於他邦未知其蘊既以為不知鍛煉之法則賞鑒之術亦不至矣於是乎學鍛煉之法發平素之所蓄思以鑄成佩刀一枚示之吾藩齋藤某大村某者過觀之曰善似薩摩刀云斯二人者善賞鑒之術無吾藩出其右者余於是乎研精

7638
Freer Gallery of Art
Washington, D. C.

覃思旦夕求之未得其歸趣猶渡大川無津涯矣曩得鎌田子之書讀之歎息以為能得吾意之所求到于斯乎自茲以降欽慕不已猶瘻人不忘起盲者不忘視矣然肥之於江都也地之相去三千里風馬牛不相及懸念有年於茲今茲己酉為欲講究素志以求鍛煉之法遊於江都往日得賴川部正秀相見鎌田子聞齒牙餘論余亦盡鄙情而問之若鐘之應鯨今也昇平二百年文教競興武備不廢雖有賞鑒之書如古今銘盡新刀銘盡者未極其蘊無所折衷也今也鎌田子祖述京備憲章相州著辨疑若于卷辨蒙士之疑其言也明其論也詳渙然冰解怡然理順海内被其化者不可勝言也其功豈不偉哉是其緒餘之所及既已若此則鎌田子之所

蓄可推知也古之所謂風朝氏者非邪余固非文學之士執干戈衛社稷者也故文不能伸意聊陳所見而贈焉

肥後　松村昌直拜具

新刀辨疑卷八之索引

一丁	明壽	同彫物	稲荷住	國輝	國助	両作	兼道		
二丁	正清	寶榮	冬貫	兼房	秋房	安貞			
三丁	清一	廣隆	鷹諶	吉永	長義	國輝豫州			
四丁	國憲豫州	國豊	貞幸	安當					
五丁	國平	永重	永朝	明久					
六丁	清綱	震作	大陸奥	蜜作	慶榮	宗永			
七丁	兼光	國廣	包保	助宗	行廣	正廣			
八丁	弘幸	廣助	義長	一英	武永	安國			
九丁	安在	元直	良時	實澄	元安	助廣刀小			
十丁	國貞	良忠	真政	國光	吉光				
十一丁	國義	國廣	吉道	埋忠之矢根					

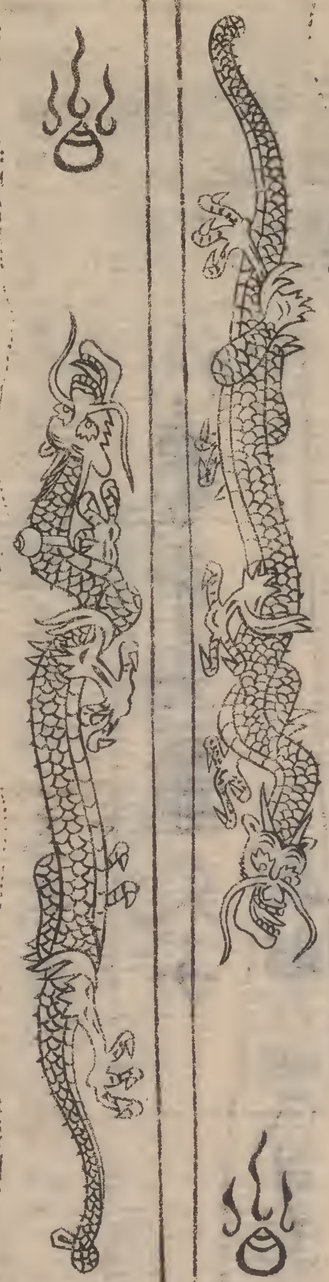
十二丁 埋忠之矢根　義國　國安　久道久次両作
十三丁 忠國三代　兼先
十四丁 兼次　兼先三工　壽格
十五丁 重行山形　長信　高廣　卜傳
十六丁 彎　安次　安英安貞両作　光正　國佐
十七丁 友道　久國　輝廣　清重　國宗　忠金
十八丁 祐定三作　清重　國平大坂　國重　盛國　國平薩州　重信
十九丁 包國　昌常　國包　廣隆鎗　安倫　虎徹　長旨
九　丁 忠綱彫物　助廣角　助廣真改両作
九一丁 両作之記

新刀辨疑卷之八

岩城國西陣住人埋忠明壽

慶長十三年三月日

所持○地○忠彦八郎重代



世小埋忠明壽作彫物子孫吾濤と稱せしと又今不拘埋忠彦八郎重代と申すもの多くあるよし彦八郎の子に疑あり彦八郎の男三男の又八孫なるべし此説確の説なるべしとあり

此ニマテ小肉アリ未ハ角ムク

○濃州古関無則五代傳
山城國伏見稲荷住
ウラ　慶長五年二月日

此工の名ハ多ハ古関兎又ふ也大抵の作也

小肉

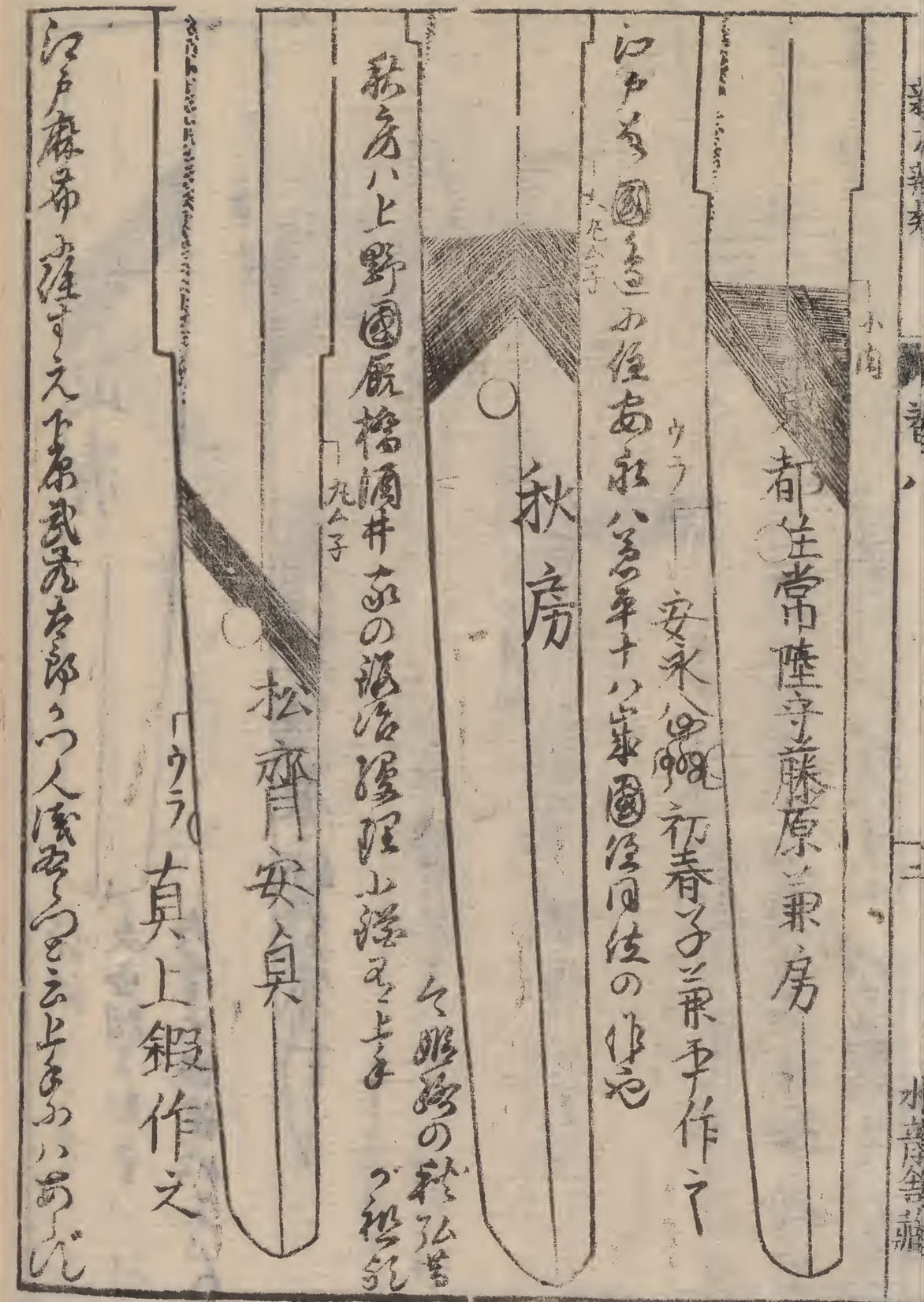
○伊勢守國繼　又子
國助ハ四代目なり

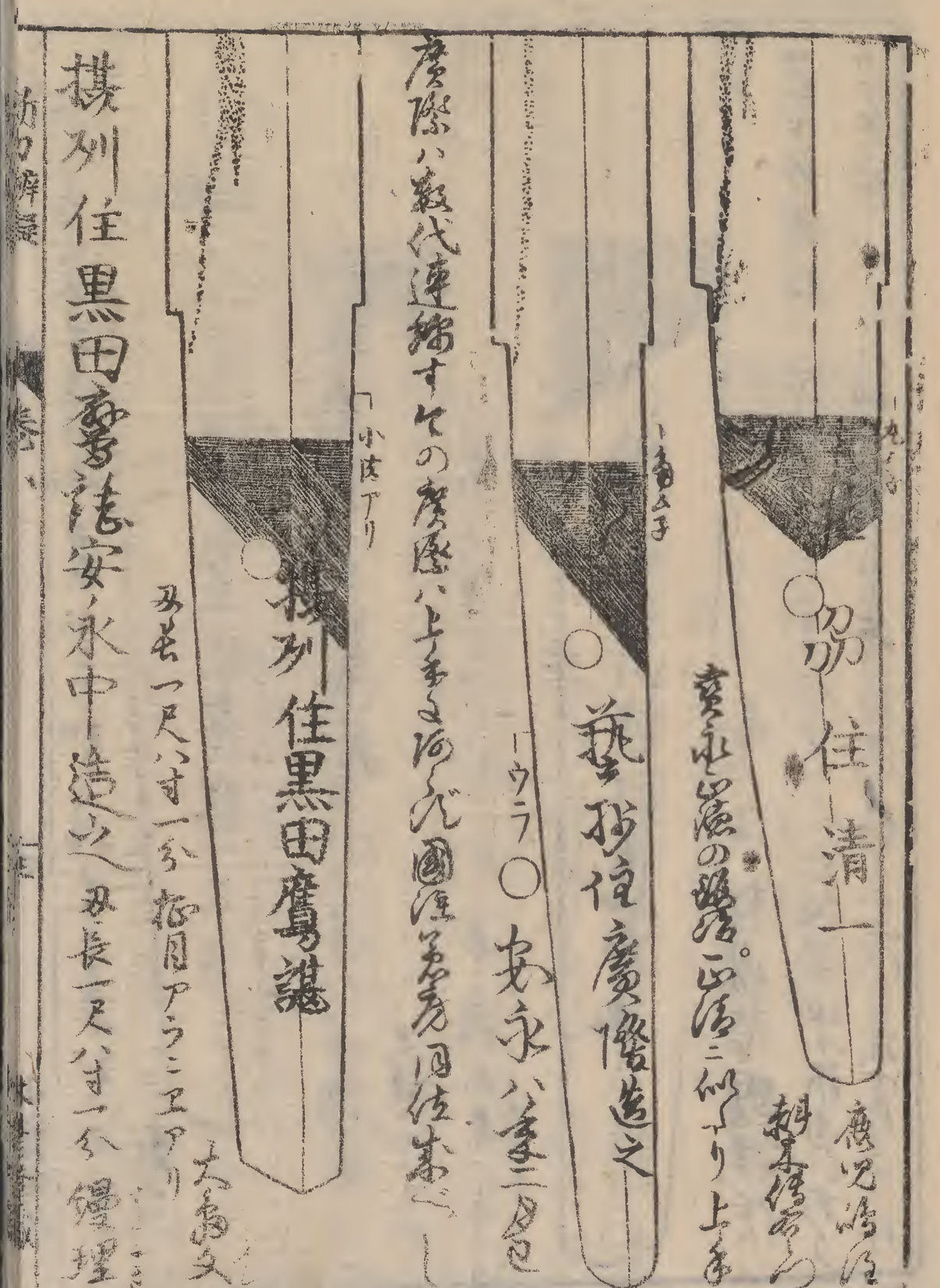
角ムク

○河内守國助　両作

○
○
○
角ムク

○
○
○


小国
有笠常陸守藤原兼房
安永八年初春之日兼房作
江戸表国重の住安永八年十八歳国俊同住の作也
九分五厘
秋房
秋房ハ上野国厩橋酒井忠の藩落合住山城守上手
九分
松齊安貞
真上鍛作之
江戸麻布住す天下武芸者の部つ人成安つと云上手ふハ高し


九分
住清一
廣兄清住
耕平清の藩。正清二代より上手
一寸五分
○
兼秀住廣隆造之
ウラ○安永八年二月
小反アリ
摸列
摸列住黒田鷹雄
廣隆ハ数代連綿すその廣隆ハ上手なり国俊第房同住業
丑長一尺八寸一分 松田アラニエアリ
丑長一尺八寸一分 鐔理

初代忠吉子五左ヱ門吉長永正十年ヨリ切腹ス上手ヤ初代忠吉出来ル
初のもの

肥前國佐賀住吉永

陸奥會津住長義

小鍛冶ふして
也道ヶ出来のもの

上手ヤ出来カ人のもの切腹ス別人家ニ秀詳為集ヲ書ふも
のもあり

豫州加茂山住三好藤四郎事

上手ヤ出来カ人のもの切腹ス

和泉國大掾藤原國運作

初代ハ二代目ヨリ上手保中の人ヤ故溪ふ流自ハあり
上手ヤ出来カ初代ハ故ヤ老後の銘國ヒ切ハ二代目出来ヒ上手

豫州松山住藤原國運

明和九年壬辰八月吉日

先祖三好六左衛門清長寛永年間ニ豫州松山城主ニ仕ヘ後ニ家
老ヲ勤ム合長寛文中和泉大掾藤原國輝ヒ交ル三代目ハ摂
州大坂小林伊勢ヒ國輝ヒ門人陸奥守橘解政ヒ和泉大掾國輝ヒ
子ヒシテ元禄中豫州ニ移ル初代ハ和泉大掾國輝ヒ
号ス國輝ヒ子五代目ハ故ヒ家永年大坂ニ住伊勢ヒ國輝ヒ弟
ヒ二代目ハ故ヒ家永ノ子ヒシテ藤原ヒ國輝ヒ云フ間ハ代々家ノ父ヒ後
ヒ家ヒ

「角ムシ子」

○河内守源来貞華

中河内住人

拾遺集に国貞

○摂平　平安當

出羽工藝集一書に国人の書おき為ふり後に元亨年間
芳流仏を蒔絵に鎖ひ作るの色あり安堂かくの如しとも

○薩摩国住国平

小肉ヲ

国平ハ後鳥羽院ノ御宇ニ出ル

小肉アリ

○根来丹藤原永重

奥州仙臺住和田半之助房長後貴僧修三七日護摩命
永重造○之附與○従五位下来山氏兼丹後平藤原
貞政昇落二胴常帯焉　貳ツ胴

永重ハ奥州仙臺の産工也　高麗面に見へず　地蒔絵に松月淵ひ
ふて小蒔絵ひ添ふ　仙臺中世代國包也　奥べ記相見へて信ずる事

左ひら

○ 永朝

羽州出羽の住人秋元長の作也於横手ふかく探索して白ひかり
ひろ〻の事出来る者〻西国の人之を若中〻て刀鍛を造らんば
ならんか

大ひら

○ 寶暦四甲申年三月関口氏為源晴久造 ○

光徳

○ 文藏光吉英真十五枚甲伏造之 ○

吉長を郎康國ゝ子也於横手ふかく探索ふかく探索して白ひかり
松舟ゝ左ゝ作又国〻疑らくハ左ゝ子ゝ有ら歟

角ひら

○ 山城國住藤原清綱

清綱ハ國俊ゝ出来ハ趣ゝ也佐多れ共実文ハ見へ〻ら〻

先ひら

○ 震作之 寛文九年八月日

刃一尺七寸四分ゝ細元武寸鉾線程走ゝ上へ佐ゝ毫文又
先ゝ三四寸程程地淡強〻内一震のゝを有ゝ〻ん
恐〻くハ綱宗卿の随物

角ひら

割 ○ 於信州松本以君命鍛
○ 殘一折故慎陳銘所持 藤氏又子

右陸奥ゝ住信州松本小助大ゝ〻〻〻也

小肉

○三宝作○

地鉄素く小沸多し〜廣綾理末の子代露の如し〜茎もの代を
丸ムク子　　ゆへたり

○慶栄

慶栄ハ寛永比の藤原氏の流の系なり三原の末裔房の如く或ハ江戸の吉正
カクムク子　　ハ似ル上手也

○住藤原三永

宗永ハ大坂の住兼重の門人なり書集ル事
海〜綾理地代ハ不並ぶべき上手なり

ウラ二月日

小二ノ

○越後住無光

ウラ○文禄二年二月日

三書に遺漏す

地鉄強く細綾理関の奈良太郎兼常ハ似ル上工と云べし
ムク子

○自信濃井四代目國廣

平尾る不の物ハ結ガ多し位の甲乙難すべし〜是形城川りのと
同〜國廣ハ末裔べし〜一書の大坂の國廣あるも知ラズ〜注後
小肉　　評を待耳〜

○濃州住巴保

陸奥ニ〜別人あるべし〜地鉄細に細綾理書命　　一説の低ハ似ル称
　　べし〜

〇加住助宗　ウラ　慶〇安貞年初冬日

後集ニ云助宗ハ津田助廣ノ門人ナリト今此銘慶安ノ年号ヲ切ルベキ筈ナレドモ初代助廣ノ門人来ベシ長寿ニシテ慶安ノ頃マデ存命シ子孫又二代ニ及ビ名跡ヲ継ギタルモノヤ慶安二年ノ延寿元年ヨリ二十三年ニ

小内

〇前国行廣

友工ニ今ハ人ホ〻ク位モ今ノ右吉忠廣ニ同

小内

〇肥前国正廣

刃長二尺三寸一分

〇平安城藤原弘幸　刀ノ形ニ切リヤスリ

弘幸ハ後集ニ云如〻堀川住ニ切ル中心未ダ出サズ銘ニ所〻ニ

〇島田小十郎廣助於信州　九ノ子　サノ表

貞享二年二月六日

島田小十郎助宗ト同人ナルベシ津田助廣寛文年ノ作ヲ受ケタル大長文ヲ作ル上工ニ

小内アリ

〇於摂刀刀平安城源義長

大摂稀ノ丁子ニ長文大坂出陣ニ助信住ノ作ニ上ト尺ヘタリ寛文延寛ノ比ナルベシ

○筑前國住人英遠

武永

（九ムラ）

○大藤原國路　元和八年二月吉日

（ウラ）

○川連富使武藏太郎安國

於武及麻布真九鍛作之

（ウラ）

宝永七庚寅年八月吉日

同國吉國ホの一
家ベしを出ま
住をホ納ゆくり
迎寶を和比し

武永ハ吉集一書ホ人ハ
ま地鉄和ま拵目鍛ひ
加賀越前の冶工ま人
上手ちのし

小竜文双
稲をちき
にあるす

薩州住一平藤原安在

（ウラ）

應藤原義正之需而作之

安在ハ奥屬ホ来の流冶ム正良元年ホ同住のものム

（九ムラ）

薩州住元直

（ウラ）

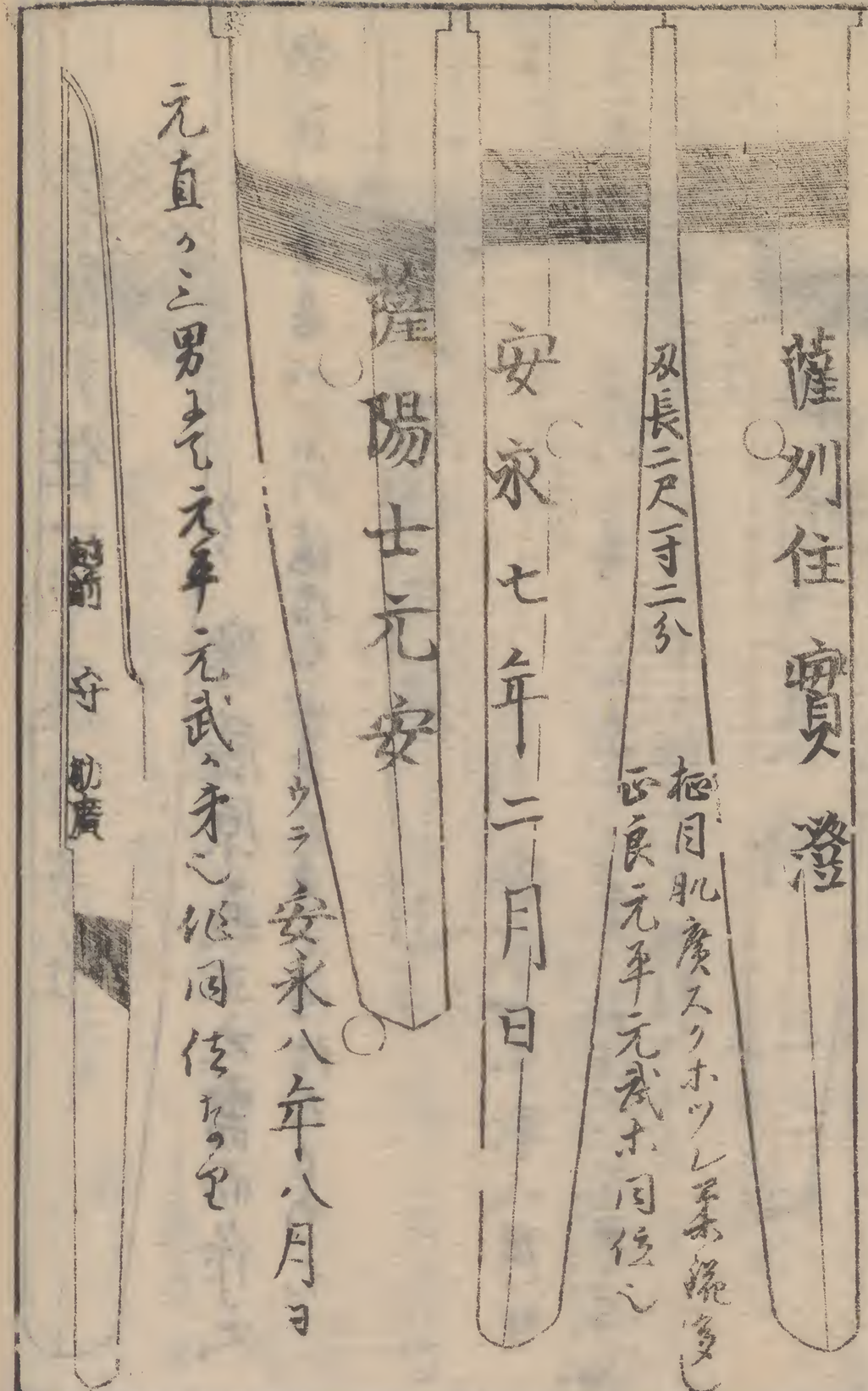
安永四乙未八月日

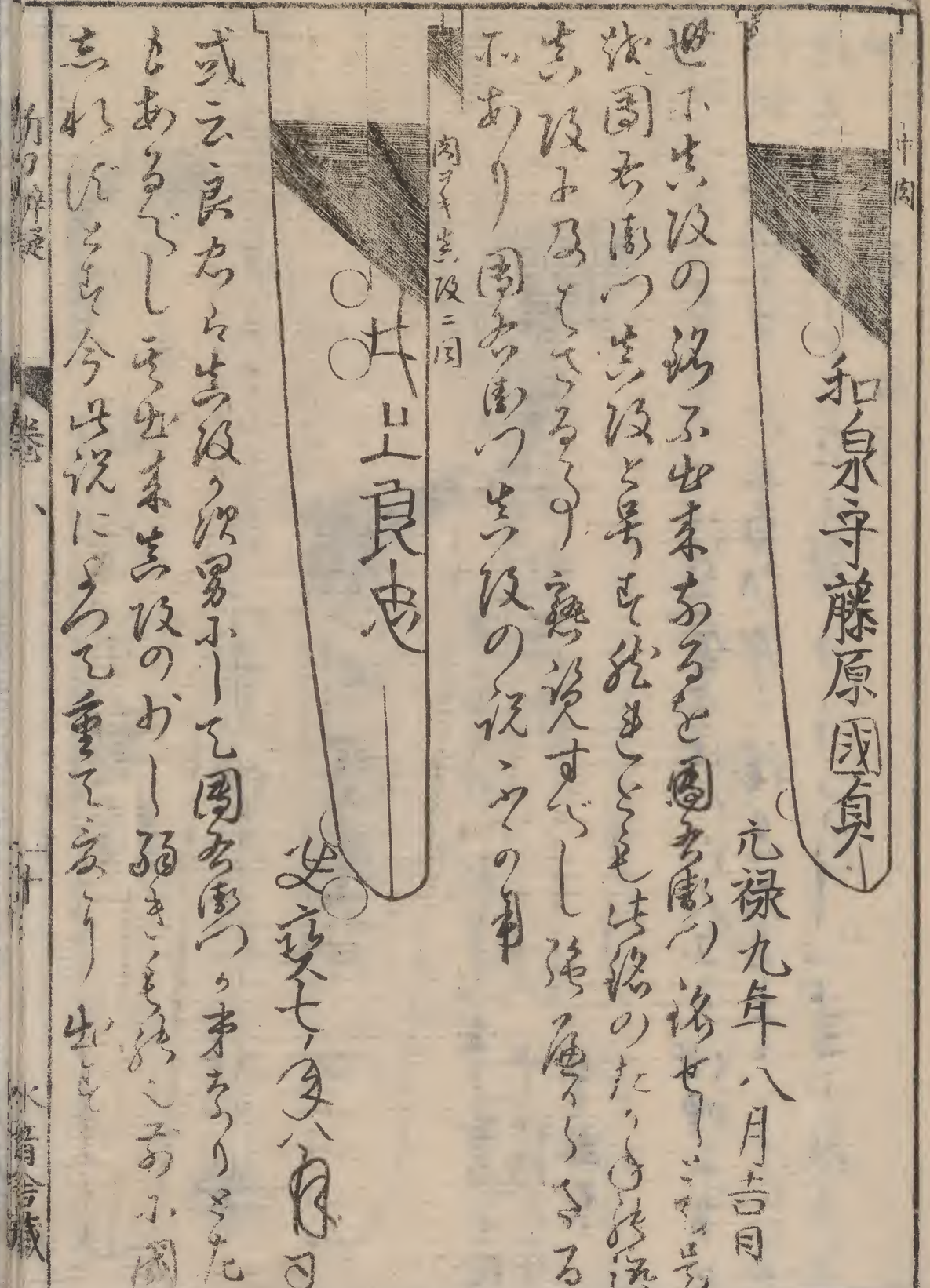
元直ハ奥小左衛ノ と号に和泉ち忠重ち孫まて元貞ち子ム
元平元武元あ三人の父ま〻住父子同列ム

（九ムラ）

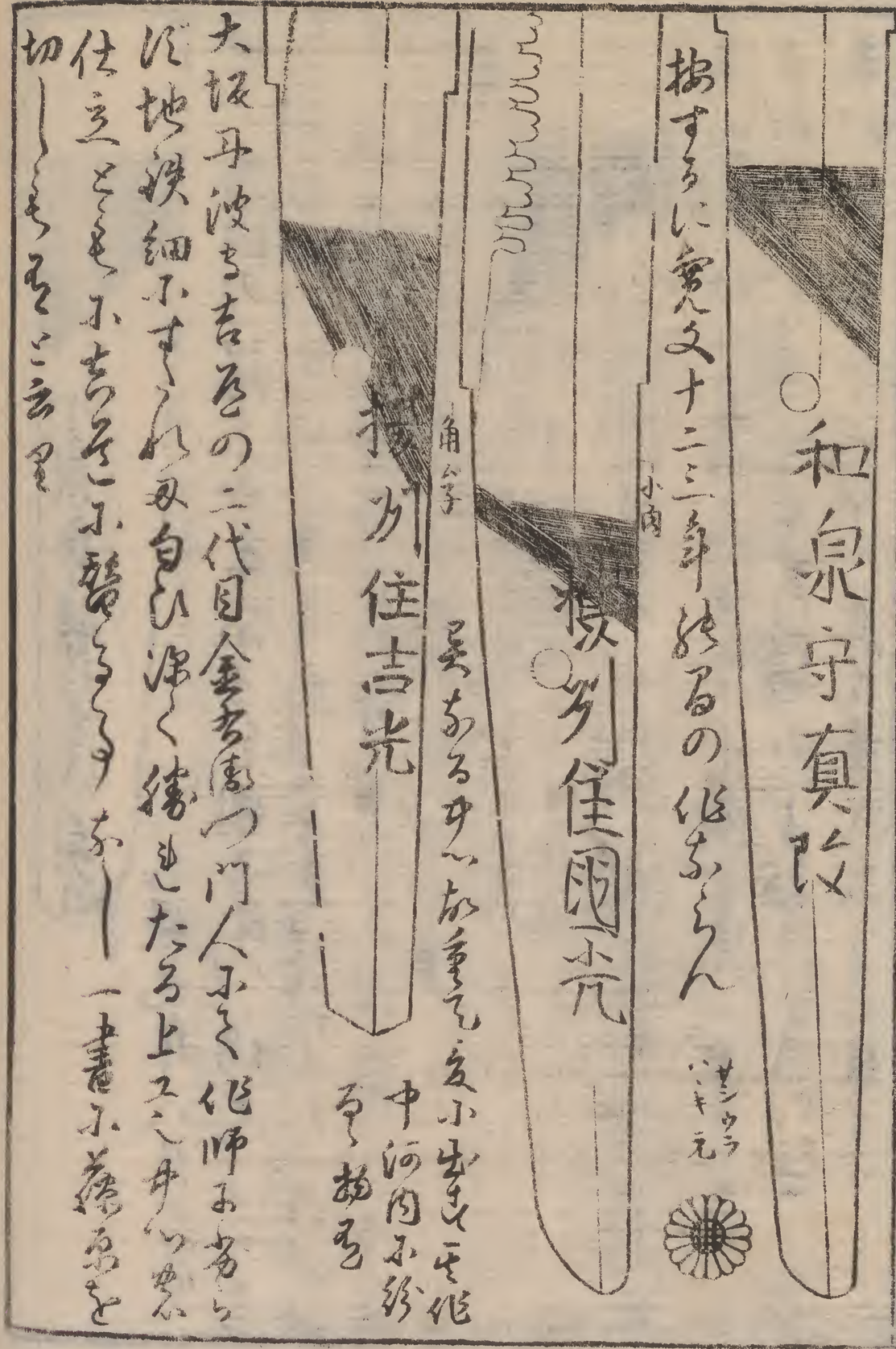
隅○州住良時

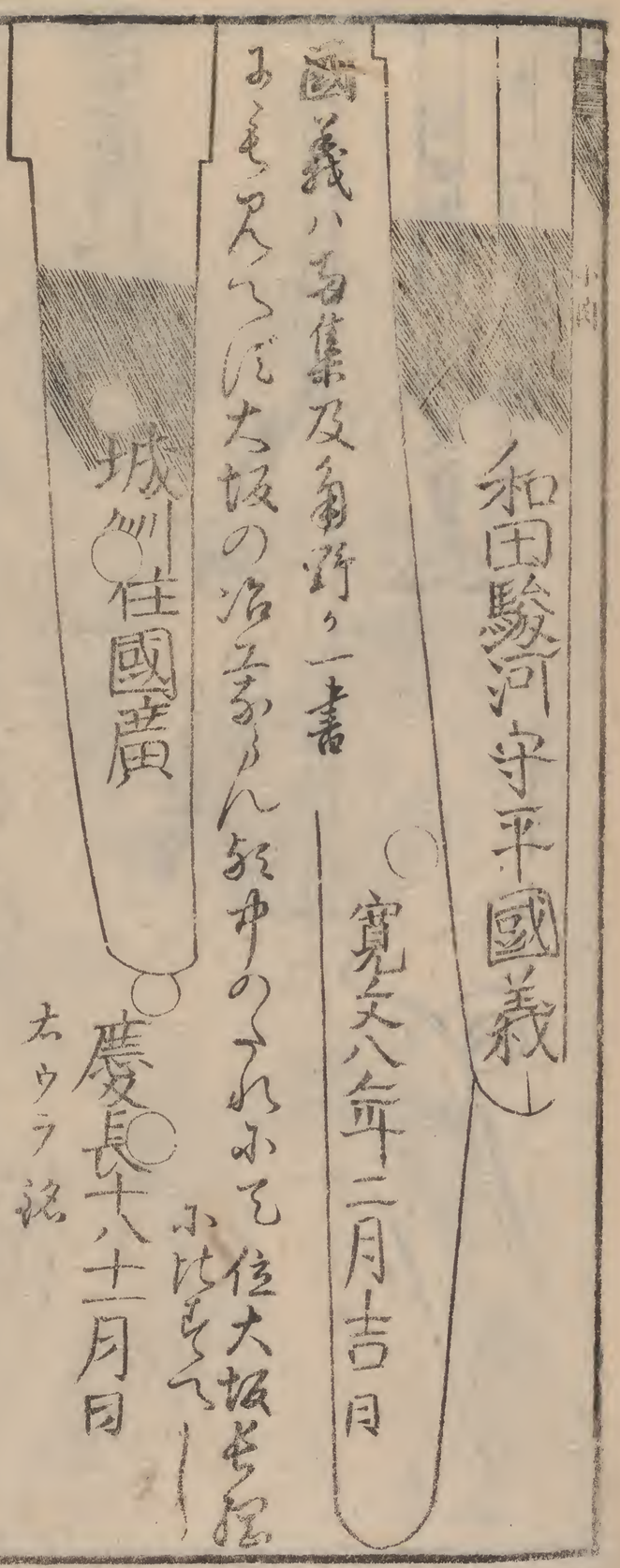
良時ハ薩州平良ち門人まん

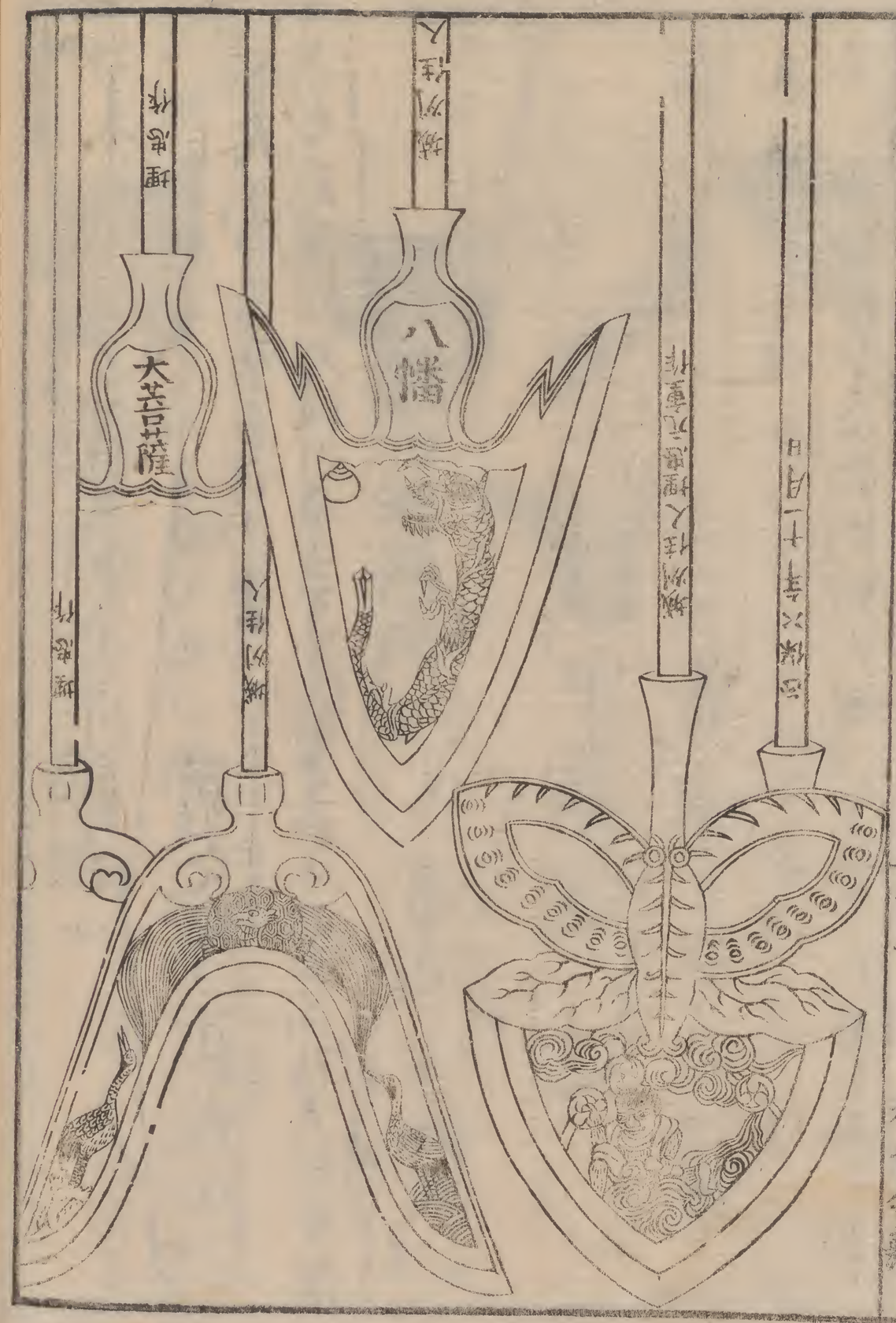




或云良中ハ出来ハ新刀ハ國貞ハ
ハあるべし元出来出来ハ
出来ハ出来ハ今出来に
ハ重て云ハ出来


○和泉守真改
拵するに寛文十二三年ノ作ならん
サンウラ ハキ元
○摂州住國廣
角字
長あるゆへ加重ス文小出ス正作
中河内小路
ゴ拵
摂州住吉光
大坂丹波吉光の二代目金者つ門人ゴく作師ゴ者ら
ゴ地鉄細ゴすれ共白ひ沸く強きたる上ゴ丹ゴ出
住ゴとも小吉ゴ小ゴ者ゴ
切ゴ吉ゴ
一書ゴ義ゴ者ゴ


小内
○和田駿河守平國義
寛文八年二月吉日
國義ハ百集及角野ノ一書
ゴ者ゴ大坂ノ名工ゴ
ゴ住大坂ゴ
ゴ住ゴ
○住國廣
慶長十八年十一月日
ウラ銘
○秋守十二道
ウラ
寛永十一年八月吉日
東初代吉道ゴ百集ゴ
ゴ出ゴ
ゴ出ゴ


八幡
大菩薩
埋地作
城州住人埋地元重作
城州住人埋地元重作

八幡
城州住人埋地元重作
城州住人埋地元重作

豊後守義國

ウラ　三条堀川住人

右一刀片平作ヨシテ地鉄大舟
小龜文北目砂流ヒ堀川國安ホノ〻ヨリ
ヒトシキモノ

國安

彼ノ作ル出来ヲ見テ出ル

近江守源久道
嬉子源金四郎

西面左ヤスリ大切先
長二尺五寸一分半

國安
はのくとき
沸もこ

中心ノ仕方

金四郎生年廿八家ニテ作之

運者有天善戦者不死
元禄二年八月吉日　久道六拾四歳ニテ造之

信濃大掾藤原安國

二代目

国懐國兼先太國若子後国集其子ヲ世ニ出ルヒトイ
ヒ其系伝詳ナラズ此ヒトリ人蓮花ヒ風流乃
四ヒ其ヲ以テ尺ハ元祖忠國ヒ出ル
相大掾國信ノ門人ヒ子ヒリ又刻國ヒ改寛永ノ時ハ出国懐國
ヒ取ヘシ此忠國ヒ改国十一年八月信濃大掾ヒ受領ヒ
八郎左衛門ヒ寛文六年ヒ在命ヒ家ニ出ヒ
八二代目ヒ又四年八月ヒ
二系ノ内ヒ伝ヒ出来ヒ
ヒ下ヒ雄刀ヒ作ル二尺深五寸ヒ在命ヒ
刀二尺中二尺ヒ刀二尺ヒ

丸ムシ

信濃大掾藤原忠國

四代目も山本八郎左衛門と云父祖の事は上に記す

丸ムシ

忠國

四代目

勇悪取任藤原少無先

三代目

無先の実は祖八日蓮伊勢と云関の

無元さつ人とする天正の頃信濃の国佐久郡出生日蓮聖人と云無先と称して二代目八幡宮に慶長の頃ところ代ふ一生他事見三代目八日蓮宗十郎と世に初代の無先といふ紹実八は宗十郎なり

丸ムシ

四代目八国幡宮生まれ日蓮宗若衆つと云業

因列住無次作

丸ムシ

小内

丸方面トル

小高久ふ一を地漢俗く上る

五代目日蓮宗聖と云元祖八来の云

因列住藤原無先

丸ムシ セニ

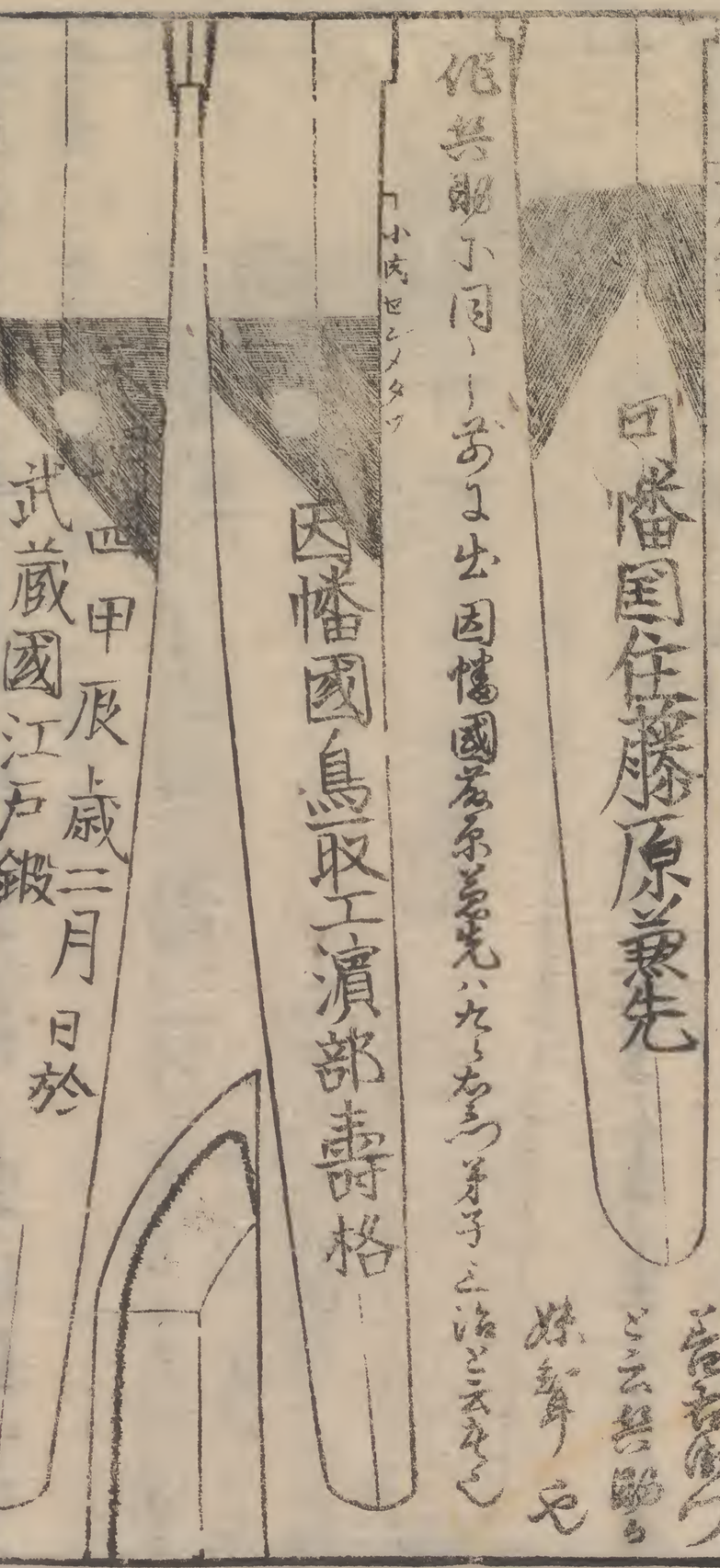
因列住無次先

あと身より無次と名乗て初八無先と切しわや後集の名

右衛つ也其右衛つ家也

六代目八今の名立にして上る也延享三年実云月廿七日

日蓮代改て為掛と氏を



マルムラ子

因幡国住藤原兼先

作共頗不同〻あり出因幡國若狭国先八代ゝ右三つ茅子と治と云ふ

小内セヒメタウ

因幡國鳥取工濱部壽格

武蔵國江戸鍛

四甲辰歳二月日於

因州蓮花寺承欽八予ゝ相鍛の一人也其國工濱部壽格
左衛門代ゝ鍛冶を業とす其先ハ九ゝ右三つ茅子の者ハ
江府ゝ出り予ゝ鍛冶を試ゝ予に誠ゝ丁寧ゝ鍛冶ゝ

[illegible]ことを示すに日を逐て出精出
験あり其刃味強く地肌弼り帽子ゝ紀綾理ゝを流ふ
初め兼ゝと名のるゝ茅紀の霊ゝ伝を領悪と改ゝ壽格
又壽格ゝ改めさせ今ゝ海内ゝ上ゝ出る切物ゝ多し殊
年終ゝ切せず程ゝ佳境ゝ入るもの多し茅春充門人
悪平真佐真臓あり

小内

刀山形家士山口此右門重行

ウラ 天明三年 二月 日

重行八正秀
の一人也ゝ作
米沢住正通

臣下古山子英代山形住正秀他壽住國色所ゝ皆壽ゝ同
住の作ゝ近世ゝ義氏徳永氏水野日州の我他武ゝ
八王子ゝ吉邦又八諸國の一人打水粉多し絵ゝ
不弼流の刀好ゝ人多き故縁ゝ評ゝ及ぶ

○奥列會津住長信

長信ハ古集及角鍔ノ書ふも見てゝ

そゝ出来京二代目也相右掃國法ノ為文ヨ似ル地鉄潤ひを

て弱きことあり信長至京に用ー

角ムク子

○米澤住高廣

鉄ことく地鉄細小色ひ有て為来る図のめー上品ニ

カクムク子

○常列水戸住坂東太郎鎮正入道ト傳

古集に出る和泉守と誓てる都合不出也

小肉

○獨

ウラ

○矢田作十郎源助正永號劔

尾張國名護屋の相劔家矢田作十郎なる者あり

六十餘年なるべし必新號劔を人の風るるもん

出況の低数刀をなるにさのこと上立とハ見てを加トおの風情を

のみ好商ハ鷹も知るべし

マルムク子

○大和守安次

ウラ金象眼　三ヲ

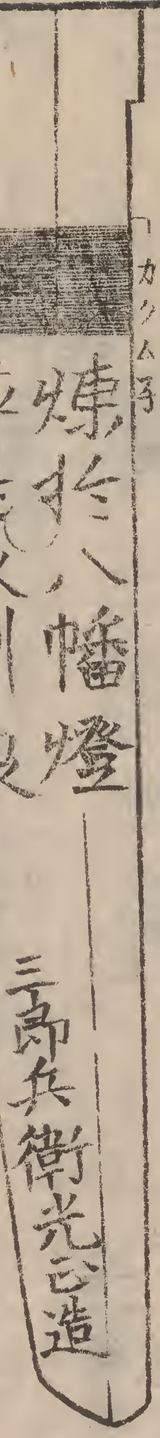
山野嘉衛門永久判　寛文二年霜月十三日

參ッ胴截断

繕理丈ハ見ル

ものあり新徳国

人ものや

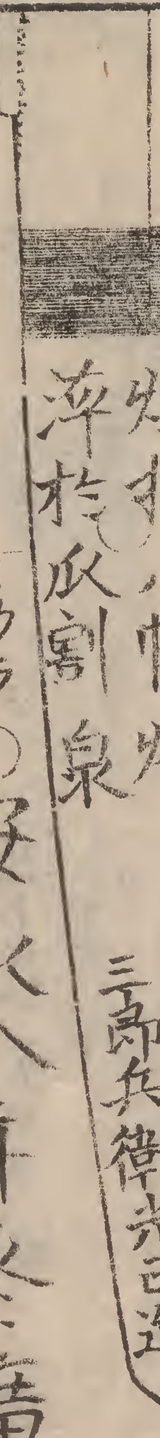


「丸ムネ」

○武刀住　安英
安負

ウラ以南蠻鐵眞上
鍛作之

武義太郎安國の一類
ふしぎ安吉八松齋とも切るもこれ出来武義太郎に似たり

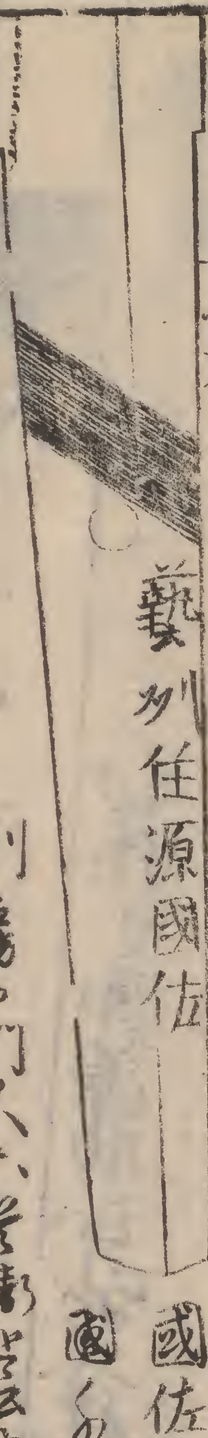


「カクムネ」

煉於八幡燈
淬於瓜割泉

三郎兵衛光忠造

「ウラ」○安永八年冬廣

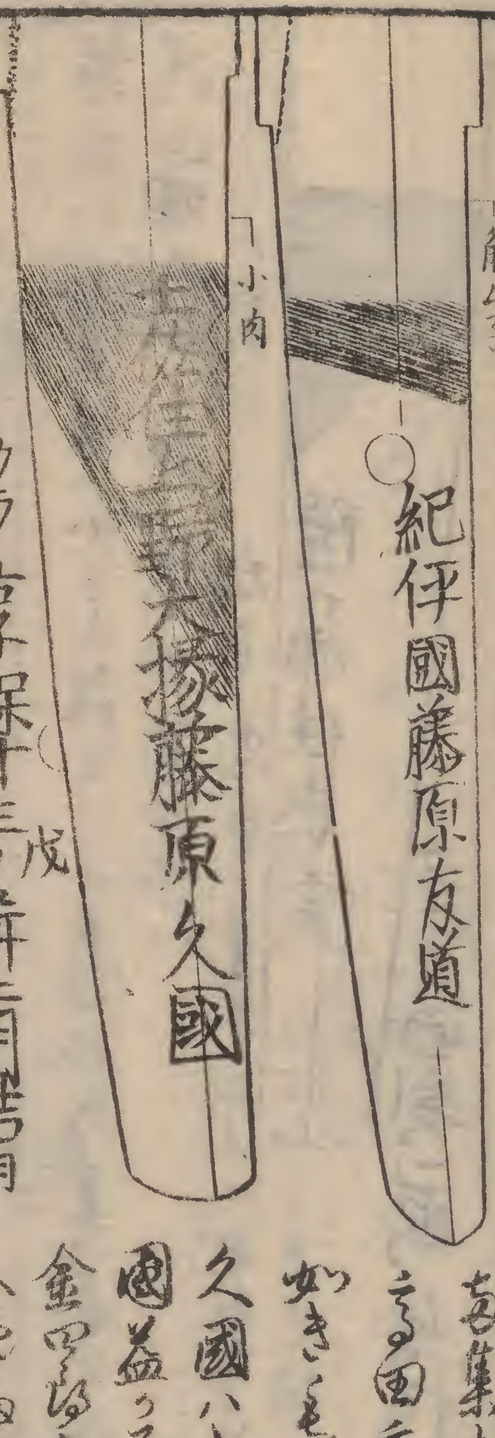


「小ニク」

藝州住源國佐

國佐八常陸國の戸示住

則房の門人八長崎に廣まる住
享保年間の工にして大鍛の上手也小龍文多し



「角ムネ」

○紀伊國藤原友道

「小内」

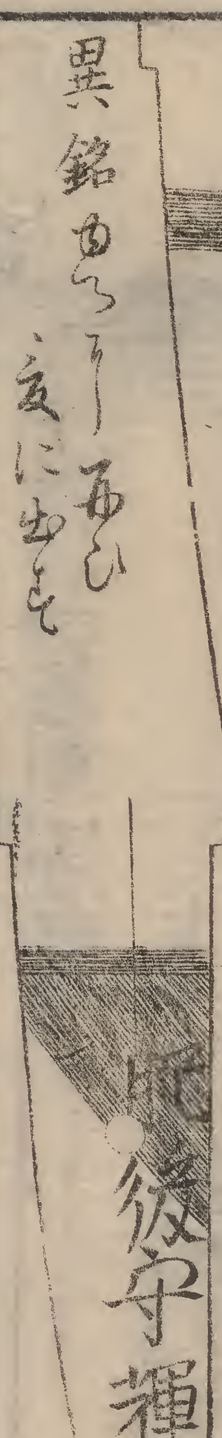
摂津國大掾藤原久國

「ウラ」享保十三戊申年二月吉日

久國八上野大掾
國益の子にて京
金四郎久道の
人也多集者し

右之銘依て京ふ國後出て
「角ムネ」

肥後守藤原輝廣



「刃長一尺七寸五分」
「角ムネ」

異銘多しかれども
皆に出て

肥後守輝廣

角ムク子

○長州住藤原清重

後乾きの地肌

物を沈彫もの古ふ業をでつきにあり作業を勵まされし

ヲモテ　天下○泰平國士安人王　直信重代

細優理

○山城守藤原國宗作

越前の國清國ゑふとも銘ぜしや中心作位業全く同し又國清山城大掾と切しるものあり

小角アリ　右宗忠重の弟子まつんが作るとしるせよく似たり

薩刀住忠金

ウラ　寶永八月日

角ムク子メニトリ

○用列長船住　七兵衛尉源光衛門尉　宗光衛門尉　祐定作

此三人ハ永正祐定の先代の弟子也寶永より第治寛文比は工也上手

○八幡大菩薩

末世劔子孫寶

備前國住二王清重

周防もつの二王備前にて寿しらんもの出来備前清光祐定ホのうちなし

○薩刀住國平

実説つ人川崎住吉清光の門人也の門人國平なるべし

ウラ　延宝七年二月日

○中國水田住人久良国重作

丸ムク子

○杜氏八幡宮子本院盛國作

國重等國國平作

小刀

○武州住藤原重信

奥州振物の重信は武州にあり〳〵又別人あるや詳なる〳〵出来
茎物の金質小似て茎味絶小為文多故集一書まもなくなる

カクムク子

○越中守包國

カクムク子
カサ子アワシ

包國の中心支集の銘正〳〵〳〵なれば小文小國氏

○徳永式部卿法印壽昌
嬉流藤原昌常慰鍛之

ウラ 天明四甲辰年十二月日

徳永氏の他
地後出来た

カクムク子センメ
ヒラセンメ

に正秀小似て後世ものをよく〳〵とせんか

○奥州住人藤原国包作之

ウラ 天明四年十二月日

今の國包八
心子正秀ウツ

人ホ〳〵て玉鋼も亦用〳〵理のそれホハ刃味絶を越て今の
鍛冶は詞〳〵説のりはそ刃味詞〳〵とちうへきなり

○藝州住藤原廣隆作

右十字槍の中心元は廣隆八元祖ふしを陸助と云初代の出羽ち拵國路國儒ふも似うり上手なり

カタムネ

○興加住安倫

あ倫ハ京系前ふ拵も他の評ハ茶集に詳也沼中心初のめきもくる

小肉アリ

○長曾祢虎徹入道興里

丸ムネ

吳虎徹壮年の作也出来もよく大鋒なるに美し

小笠原左衛入道

オロシ鉄以三十折鍛

長二尺四寸作　さくも茶井上氏忠辰

小肉

一竿子の茶面彫物たる拵重出来

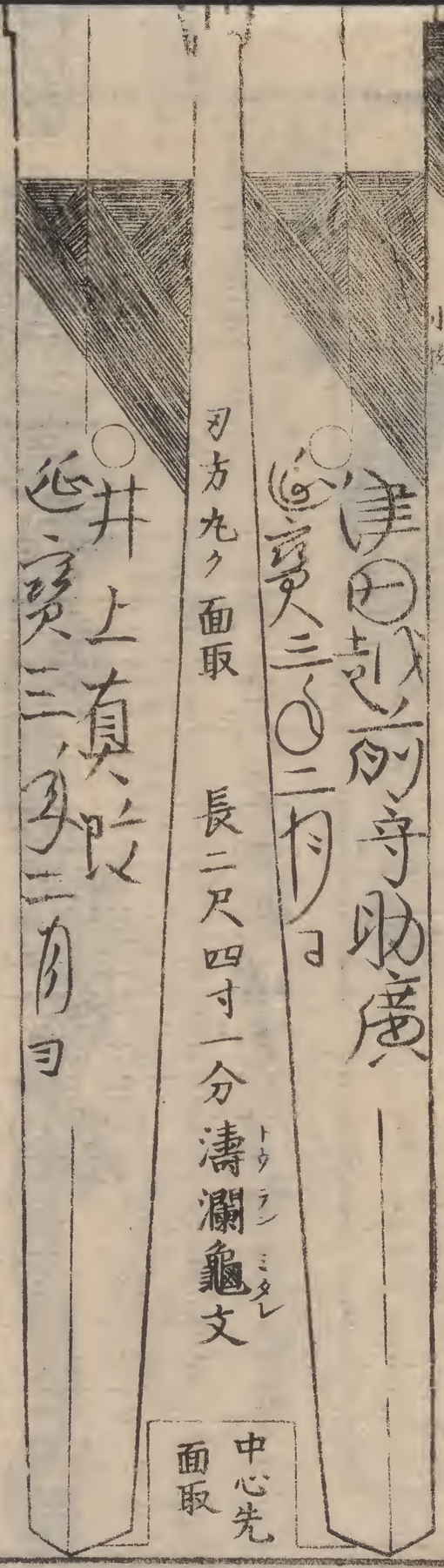
○越前守助廣

長二尺二寸八分餘　亀文

寛文六年二月吉日

寛文六年八月廿七日切ハ清四郎ゟ助廣
ゟ切ル沸ル摺出シ國友の沸ふ同し同八年以後の作ゟ
ハ尤ゟ出て来化の沸も趣ゟ中心ゟ出来物ゟ

小肉



刃方九ク面取　長二尺四寸一分　濤瀾龜文

中心先面取

寛文年中京師の丹波國の豪農也に出て
助廣ゟ出て来化ゟ沸ゟ出て来仕て
ゟ沸ゟ後遂ゟ開来ゟ来る天明二年ゟ初冬刀商

藤原新六郎ゟ者一刀ゟ拵ゟ中心を包ゟ
ゟ是を見ゟ者ゟ手ゟ摩ル破鞘ゟ入研ハ初れ人ゟ
ゟ研ゟ是ゟ地鉄研ゟ
のめき柄清ゟ先生鑄ゟ
ゟ助廣ゟ
是を敷ゟ
ゟ沸ゟ
文ゟ
ゟ来延寶の
ゟ
ゟ
ゟ

越前国住人孫六兼元の作なり　一日門人問て曰先生此刀に遇て実
に相剣に堪たる名刀也　相模の上国の人　其後の上手　助廣と云れ
し　後世に伝て　井上真改に銘ぎしと　軟鐵なる
先生の相不相　筆にあらざる　東郭子答曰　然らば此一刀八位
列に出るに　あらざる　是なり　此刀こそ　雷斬者なれ　其後
皇室と　なり　助廣を　客として　他を斬　形　[illegible]
何ぞ　高下　優劣　あらんや　他のみにあらず　他も亦
あるべつ人　[illegible]　退く